

聴覚障害教育におけるキューサインの再評価

— 日本語学習支援に重きをおきながら —

| | |
|-------|--|
| 企画者 | 脇中起余子（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター） |
| 司会者 | 長南 浩人（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター） |
| 話題提供者 | 長南 浩人（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター） 脇中起余子（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター） 原島 恒夫（筑波大学人間系） |
| 指定討論者 | 板橋 安人（元筑波大学附属聴覚特別支援学校主幹教諭） 松本 末男（筑波大学学校教育局次長） |

KEY WORDS: 聴覚障害教育、キューサイン、キュードスピーチ

【企画趣旨】

日本における「キュー（キュードスピーチ・キューサイン）」は、京都府立聾学校幼稚部が用いたのが始まりとされている。日本語の音韻体系を視覚的に表すキューは、小1で小1の教科書の使用を可能たらしめたと言われている。

その後キューは、ろう学校毎に独自の発展をしていくが、「成人ろう者に通じない」という批判の声が出始め、手話の拡がりに伴い、キューと指文字を同列視してキューから指文字に切り替えたろう学校が続出した。

キューはろう学校によって異なっており、成人ろう者に通じないという面は確かにあるが、手話を尊重しながらも、日本語習得の面からキューや指文字を冷静に比較・再評価する必要があるのではないかと。また、補聴器や人工内耳により日常会話スムーズに進む例が増えたが、それでも日常生活で使う頻度が少ない単語や助詞が正確に聞き取れていない例がみられる。この書記日本語、特に学習言語の獲得のための教育方法の詳細な検討が必要であると思われる。

（脇中起余子）

【話題提供者の趣旨】

話題提供1「我が国におけるキュー利用の教育学的考察」

本報告ではまず、キュー利用と聴覚障害児の日本語獲得の関係について、日本語の音韻情報と韻律情報の伝達効率という指標を立て、この点をキューと指文字の持つ構造上の特徴を比較することにより考察する。また言語獲得と関連が指摘されている認知能力とキュー使用の関係を検討した研究についても報告し、キューが音声言語入力手段として機能するだけでなく、それを主なコミュニケーション手段とした聴覚障害児の認知活動の遂行とも関わりを持つことを述べる。さらに人工内耳装用児の音声言語獲得とキューの必要性について、近年の研究成果を紹介しながら言及する。以上の点についてキューに対する批判的視点を踏まえつつ、キューの教育現場における利用についても検討する。

（長南浩人）

話題提供2「日本におけるキューの始まり」

京都府立聾学校のキューは、戦前から用いられた発音誘導サインが母体である。1963年度頃から日本語指導に用いた結果、小学部入学時の獲得語彙はそれまでの500語から2000~3000語に増えたという。ろう教育学会での発表等をきっかけに全国から注目されるようになり、1967年にアメリカのコネットが「キュードスピーチ」を発表したのを聞いて、「キュードスピーチ」という名称を借用して全国

に広がったと思われる。

その後、京都校では、「アメガフル」のように文章にキューをつける使い方やコミュニケーション手段としてのキューを「キュードスピーチ」、口話の補助手段として単語など部分的に用いるときのキューを「キューサイン」と呼ぶようになり、「キュードスピーチになってはいけない」として、後者の名称を多く用いるようになった。この区別は、今後キューの再評価に際してポイントの1つとなると思われる。

（脇中起余子）

話題提供3「フランスにおけるキュードスピーチ」

我が国のキューサインは、時にキュードスピーチと呼ばれ、米国のコネットによって作られたキュードスピーチと混同されやすいが、基本的には別物である。海外のキュードスピーチが指の形で子音を表すという点では、我が国のキューサインも目的は同じであるといえる。しかし我が国のキューサインが具体的な発音のイメージを表しているのに対し、キュードスピーチは発音のイメージとは異なる記号である。

フランスでは、米国のキュードスピーチをフランスの音韻に合わせた修正版としてLPCが用いられている。驚くべきことに、LPC通訳者養成が行われ、手話通訳と同様にLPCが通訳方法としての市民権を得ている。

本話題提供では、フランスにおけるLPCについて報告し、我が国のキューサインと比較しながら考察する。

（原島恒夫）

【指定討論の趣旨】

以上3名の話題提供を受け、長年、発音・言語指導に取り組んでこられた元附属聴覚特別支援学校主幹教諭である板橋氏、および長年聴覚障害幼児教育に取り組んでこられた現筑波大学学校教育局次長である松本氏に指定討論を行っていただき、我が国のキューサインの現状や今後について討論を行う。

（WAKINAKA Kiyoko、 CHONAN Hirohito、
HARASIMA Tuneo、 ITABASHI Yasuto、
MATSUMOTO Sueo）